



説教要旨 「ただ一つの福音」

ガラテヤの信徒への手紙 1章 1～10節

使徒パウロは異邦人に向かって、イエス・キリストを信じる信仰を語りました。ユダヤ人のようにする必要はないこと、正しい行ないをする見返りとして救いが与えられるのではないことを。そして、その福音を信じて多くの教会が生まれたのです。しかし、パウロがガラテヤを離れた後に異なる教えを語る人々がやってきます。彼らはエルサレムのユダヤ人キリスト者だと考えられますが、彼らは、キリストを信じるだけではならず、ユダヤ人のようにならなければならないというのです。すなわち、割礼を受けなければならない。律法を守らなければならない。信仰だけではなく、行ないも同じように大切であるということです。正反対の教えによってガラテヤの教会には大きな混乱が生じました。そんなガラテヤの教会の状況を聞いたパウロはいてもたってもいられなくなって書いたのがこの手紙です。

イエス・キリストの福音。それは神は愛なり。この一言に尽きます。「神がわたしを愛しておられる」「神があなたを愛しておられる」この喜びの知らせが福音です。自分がどのようなものであっても、神の愛はすでに注がれている。すでに神の救いの内におかれているのです。

わたしたちは、様々な決断を迫られながら歩んでいます。いつだって判断に迷いながら、少しでも良かれと思う方を選び取って進もうとしています。しかし結局の所、何が正しくて、何が間違っているのか、人間である私たちにそれを正確に判別することなど出来るはずがないのです。迷いはいつまでもなくなりません。わたしたちにできることは、その迷いの中で、自分に問いかけることです。その選び取ろうとしている道に、神の愛がどのように表されるのか、を。もちろん、それでも間違えてしまうかもしれません。大切なことは、この言葉。「わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」(3節) こう願いつつ歩む所にこそ、神様の導きがなされる。そう信じ、新たな一週へと歩みだしてまいりましょう。